

綴つたもの、國學者が古體の文章を學んで所謂雅文を草したもの、そのほか小説に、俳文に、滑稽文に、その種類の多い事は、實に前代未聞の盛況を呈しました。また作物の上には歴史、傳記、日記、紀行、隨筆、評論、考證、など多方面にわたつて、非常な發展をしました。こゝには先づ、漢學出の學者が、漢文は専門家のもの、文教の弘布には、平易の文を要すとして、こゝに一體の文を綴つたものを一類として、これを和漢混和文とし、その代表作家に就いて、内容を見ませう。

漢文學の項で、先づ藤原惺窩、林羅山などの事を申しましたが、この兩人は、初期漢學復興の先驅で、その綴る所の文章は、純漢文を得意としたのでありますが、一方に二人とも和歌の作が今日に残つて居りますし、既に羅山の著述にも和漢混和の文があるのでありますから、漢學者というても、決して國文を排斥し、輕んじ、指だも染めなかつたといふのではありません。また元祿以後に起つた國學者の側でも、先づその素養は漢文に出發したのでありますから、國學者の漢學知識は決して淺薄なものではなかつたのであります。

和漢の學がよく混和して、互に調和した爲に、和漢混交の文も生れたのであります。漢學の項に説いた徂來までの諸學者は、みな漢學者の名を以て許すべきであります。その一面、教義を平民化し普遍化せしめんとして、多くの和漢混和體の文章による著述があらはれました。その中に最も優れたもの三人は

貝原益軒 新井白石 室鳩巢

であませう。

益軒の特長は達見を銜ふ事がなく、淺近を旨として、諄々説いて倦まず、平易を以て人の心に深く入らしめんとした所にあります。其の著

大和俗訓 家道訓 初學訓 文武訓

などは、修道の要を説いたものですが、このほか諸國の地理を通俗的に示したものなどもあつて、益軒は、難解の理論を、當時の婦女子をしてもなほ了解し易からしめたほどの功勞者であります。

8. 新井白石—室鳩巢 白石に至つては、當時國民が一般の自覺心を代表するといひ得るので、摸擬踏襲を潔しとしなかつた意氣に乗じて、國史を究むれば識

見卓絶、國文を綴れば古今無雙、その他考證に語學に、行くとして可ならざるなしといふ、稀に見る文と學とを兼備した傑物であります。

白石は號。名を君美といひます。六代七代の將軍に歷仕して帷幄に參しましたが、かの儒臣林鳳岡と論が合はず、屢々臺閣の上に論戦して、八代將軍吉宗のたつに及んで、遂に斥けられました。白石の一生は、勿論政治の上に於ても、其の功勞尠からざるものがあつたのでありますが、吾々はその著した大部の書物を通じて、面目を窺ふ時に、白石の多角的な才藝に、驚かざるを得ないのであります。

先づ、采覽異言、西洋紀聞の二書は西歐の事情を究めて、洋學の先鞭をつけ。

本朝軍器考 車輿考 冠服考

は、有職故實の學に

東雅 同文通考

は、漢字假字を論じて國語の性質を説き

古史通 讀史余論

は、古今の歴史を論じて、卓見を述べて居ります。就中

「古史通」は神代の史論でありまして、神名地名の考證から、古言に通せずしては、到底その時代を明にする事は、出来ないと説いて、古事記研究の必要を説いた點などは、後の國學勃興に先立つて居る事で、白石の識見の凡ならざる事に驚かされます。「讀史余論」は將軍の前に古今の成敗を論じた時の稿本であるといふ事ですが、頼山陽の日本外史は、そのうちの史論としては、たいこの書の糟粕を嘗めたものに過ぎないとの評さへあります。

白石の文學的作物としては

藩翰譜 折り焚く柴の記

であります。藩翰譜は諸侯の系譜を記し、その履歷を列叙したものでありますが、中に勇士奇傑の逸話を挿んで筆端人物を活動せしめ、無味乾燥の記事に光彩を放つた所は凡手のよくする所ではありません。「折り焚く柴の記」は白石自家の傳であります。藩翰譜に比して、やゝ雅文の趣に勝つた傾がありますが、その優麗流暢は、今日も範とすべきものでありませう。

藩翰譜 (本多作佐衛門)

一説に同じき廿日、關白殿、駿河の國府の城に入り給ふ時徳

川殿、長久手御陣より参り給ひ、御對面の儀あり。重次此所に参りて、關白殿御家人數多並みたる所にて、徳川殿の御後より参りて、立ちはたかり、大きに聲を怒らし。「やあ殿よ殿。あつばれ不思議を振舞ひ給ふよ。國をも保たんず人が我住む城を打明けて、暫くも人に借す事やある。其掟にては、人のからんといはんには、一定北の方をもかし給はんするよな。かし給はんするよな」と語り語り立ち歸る。徳川殿人々に打向ひ給ひ「今の老人が申したるを聞き給ひてこそ候ふらめ。あの老人と申すは、本多作左衛門重次とて、家康累代の家人、家康の幼きより仕へぬ。年若き頃より、弓矢とつては人々にも知られ候ひしが、今は見給ひし様に、年もいたう寄つて候ふ。されば家康も不便の者に存ずといへ共、天性我まゝの根性にて、人をば人とも思はず、人々の聞き給ふ所にてだにかく家康をことがましく申す、まして只二人うち向うたる時の事、思ひやり給ふべし。常はいかにも候ひなん。いかでけふしもかゝる奇怪をば振舞ふべき。人々の思ひ給はん所耻しう候ふ」と仰せければ、ありあふ人々一同に、「此人の事久しく承り及ぶといへ共、見及びしは、今こそ始なれ。誠に聞きしにまさりて候ふものかな。事新しう候へども、かかる御家人の候ふ事、おくゆかしう覺えて候ふ」と式代せしといふ。

按ずるに、重次海道の諸城修理の奉行たり。此城かし給ふ事、いかで知らざるべき。然るにかく京家の人々の集りし所にて、思ふやうにいひ散したる事、まことにさる智深き人なり。重次にあらずしては及ぶまじ。さればこの説誤るべからざるにや。

これを讀めば、今日の普通文——漢字交り文——は、此期にその體をなした事に、誰も氣付くでありませう。

白石の幕府を退くに當つて、その推舉により儒員となつて吉宗將軍に仕へたのが、室鳩巢 であります。名を直清といひ木下順庵の高弟で、江戸駿河臺に住した所から、駿臺先生といはれました。その著

駿臺雜話

は老後病間の隨筆で

鳩巢小説

は主に白石との談話を記したものであります。共に和漢の故事を引用して、文體莊麗かつ謹嚴、而も興味の津々として盡きないものがあります。

駿臺雜話 (老僧が接木)

忍が岡のあなた、谷中の里に、何がしの院とてひとつの眞言

寺あり。翁幼かりし頃、其住僧を知りて、しばしば寺に行きつゝ、木の實ひろいなどして遊びしが、經僧かたへの人に向ひて、前住の時の事なん語りしをきゝ侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにて、こゝやかしこ御過がてに御覽ましましてけるが、此寺へもおもほへず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出て、みつわくみつゝ、手つから接木して居けるが御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひもよらねば、その背き居たりしを、房主なにする事ぞと仰らしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく接木するよと御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて今接木したりとも、其木の大きくなるまでの命も知れがたし、それにさやうに心をつくす事ふようなるぞと上意ありしかば、老僧御身は誰人なれば、かく心なき事を聞ゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此木どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし。然らば、林もしけり、寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かはいひしをきこしめして、老僧が申すこと實にも理なれと御感ありけり。その程に御供の人々おひおひ來りつゝ、御紋の御物

ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大きにおそれて奥へにけ入りしを、御めし出しありて、物など賜りけるとなん。いま、翁も、此老僧が、接木する如く、老い朽ぬれども、ある限りは舊學を究めて、人にも傳へ、書にも残して、後世に至りて、正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助ともなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる死しても骨朽ちじといひしこそ思ひあたり侍れ。いさゝが我身のために謀るにあらず。諸君も翁がこの心信じ給へかし。

このほか、柳澤淇園の「雲萍雜誌」も同種の文で、湯淺常山の「常山紀談」橋南谿の「東西遊記」菅茶山の「筆のすさび」成島司直の「徳川實記附録」藤田東湖の「常陸帶」伴蒿蹊の「近世畸人傳」「閑田耕筆」富士谷成章の「北邊隨筆」山崎美成の「名家略傳」瀧澤馬琴の「玄同放言」など和漢混和文の類に屬するものであります。

9. 國學 荷田東麿が

ふみわけよ やまとはあらぬ 唐鳥の あとを見るのみ
人の道かは

の詠は、實に當時一世を風靡した漢學に反抗して、こゝに勃然起つた新しい氣運、國學そのものであります。こ

れ、はた、元祿の自信自覺、模倣を事としない風潮の然らしめたもので、外國必ずしもよからず、我邦には我邦の美風あり、須らく古を究めて、その純なるものに歸れと、叫ばしめたのでありませう。東麿は京都に國學校を起さうとして、その建白書風のものを草したといふほどで、當時水戸侯が大日本史編纂の擧も、等しくこの風潮を語り、國體の美を發揚して國を守らん愛國心のあらはれであります。東麿は幼時古典の學を好んで、制度、格式、有職故實、國史、國文などを修めたのでありますが、その識見は堂上の儕輩とは全く別で、歌文の道が漸く衰頹して、或は淫蕩に流れ、純樸の風、地を拂ふ有様となつたのを慨し、一人、時流に超越して高く嘯いた觀があります。その生涯を通じて、戀歌は一首も詠まなかつたといふ話は、またその人格の一端を窺ひ知る事が出來ます。東麿には著書も多くあつたのですが、彼は其の歿前凡てこれを燒棄たといはれて居ります。今日たまたま殘存するものも、實際燒却の迹を存するもので、彼が時流に合はず、多感慷慨の學者であつた事を、思はせませう。其門に加茂眞淵が出て、爾後國學の事は榮えに榮え

遂に東麿の名は永世に朽ちざることとなりました。

眞淵の生地は京都でもなく、又江戸でもなく、その中間遠江であります。東麿に學んだ後、一旦郷に歸りましたが、更に江戸に出て、その卓見を講演しましたから、忽ち門下に參するもの頗る多く、一時江戸城下の大評判となりました。幕府は與力加藤枝直をして、その學説を質問せしめた程でしたが、枝直はその説に感服措かず、宅を構へてこれを迎へ、その子千蔭を入門せしめて、自ら師友として深く交るに至りました。このやうな次第で眞淵の名聲は一時に高く、東滿の子在滿の推薦によつて、田安宗武に仕へ、生涯江戸に寓して、著述に講説に、専ら國學の研究に身を捧げました。

眞淵生涯の目的は、佛儒二教によつて平安朝以來の人心が本來自然の真情を濁されたのを慨いて、古の眞と純とに歸さんとするにあつたのでありますけれども、その眞純は何によつて、もとめましたらうか。先づその階段としては、どうしても古文の研究、古語の解釋に著手しなければならなかつたのであります。當時既にこれらの古文は自由に解する事が出來なくなつて居たのでありま

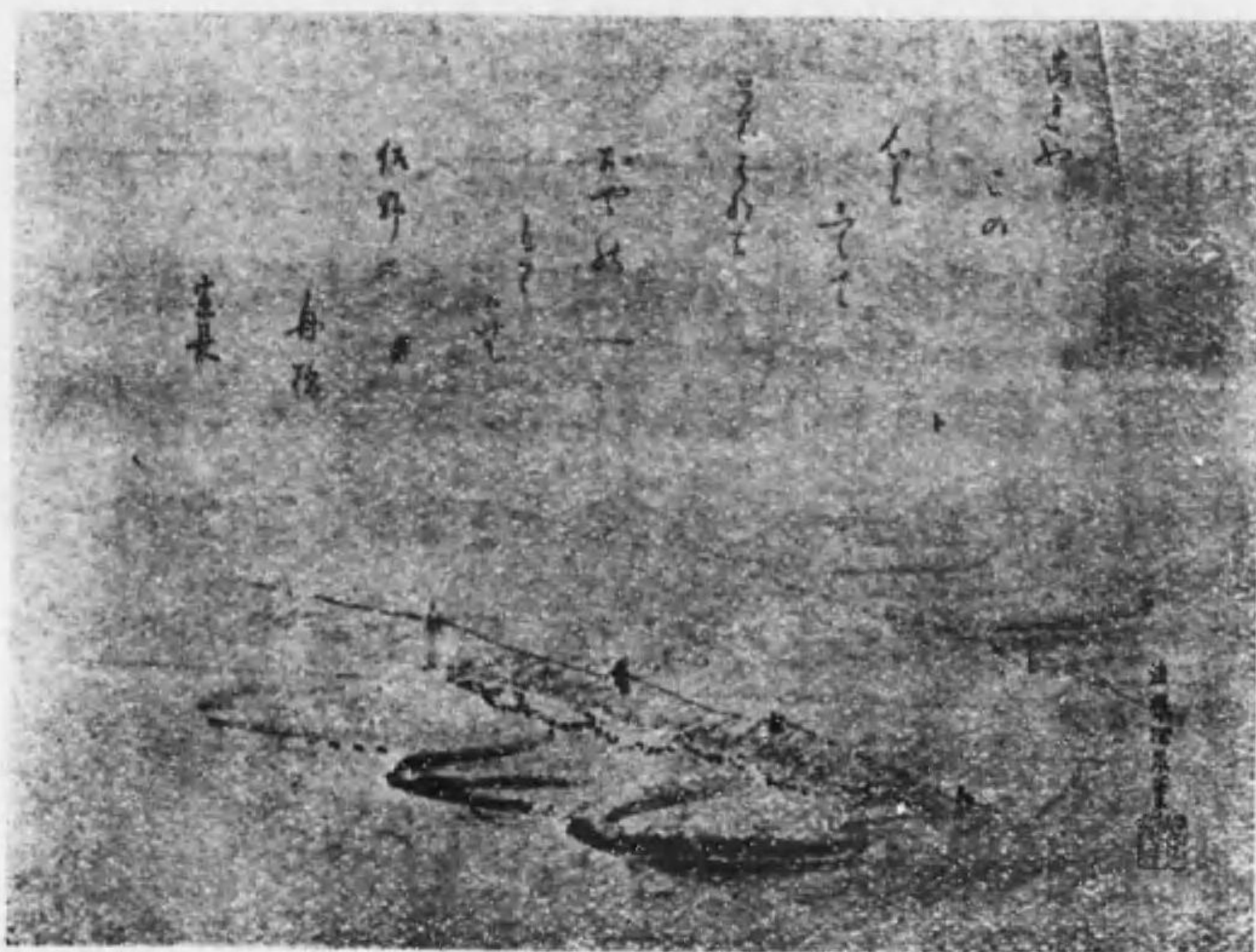
す。眞淵の著書には

冠辭考 萬葉考 祝詞考

其ほか古文學の評釋が澤山あります。何れも先人未發の卓見が見られますが、畢竟眞淵は一生をこの手段に終つてしまつて、今一步深く古の眞と純とを明かにする事は、出来なかつたのであります。然し乍ら國學の途は益開けて、眞淵の熱心は宣長を感動せしめ、その晩年ゆくりなくも伊勢松阪の宿に古事記研究の要を説いたのが、後年本居宣長をして古事記傳の大著をなさしめた事になつたのであります。

本居宣長は、伊勢松阪の人、醫を以て業とした人でありましたが、眞淵の徳慝に應じて、三十五歳から古事記の研究に身を投じ、實に三十五年間の苦心を経て、四十八卷の古事記傳が作られました。

古事記は神代以來の傳説と歴史とである事は既に説きました。宣長の研究は、文辭の攻究に一步を進めて、神ながらの道を明かにし、神代は近代の思想を以ては到底理解し難いものが多い、淺薄な人間の智識を以ては、天地と共に大きな神意を量る事は出来ない、唯仰いで以て



本居宣長筆蹟

信ずれば足れりと説いたのであります。理性の知るべからざる所は、これを信仰に待つといふ事は、多少學術的研究を離れて、宗教のひらめきがあつたのでありませう、この後各方面に所謂宗教的の神道といふものが起つて來ました。然し宣長の態度は、あくまでも純學者的のものでありまして、その古書に對する時は、博く探つて旁證盡さざるなく、諸説の異同を綿密に辯じて、最後に歸納的斷案を下す所は、嘗つて見る事のない用意周到の論法で、その論據の堅實は、やがてかしこき神の道を説くに、最もふさはしいものであります。

儒學と佛學とのほかには、思索的方面の何ものもなかつた時代に、この神ながらの道が稱へられたのでありますから、宣長の名は奥羽九州の果までも高く轟いて、來り門下に投ずるもの其數夥しく、諸侯はもとより宣長を招聘して止まなかつたのでありますが、遂に辭して應せず、専心攻學につとめました。門下に秀才は許多ありましたが、就中優れたのが **平田篤胤** であります。篤胤は宣長歿後の門人でありましたが、深く師の道に敬服して、その性の剛毅果斷であるのにつれて、勇猛精進、一身を挺して斯道の宣傳につとめた勢は幕末の見ものであります。

篤胤は舊來の神道が、漸次外教の影響を蒙つて來たのを察して、先づ祭神の儀式に純日本風のを制定し、所謂平田派の神道を起して、これを基本に、二千年來百般の事物に被り來つた外來思想を一掃し、國民はこゝに覺醒一番せざるべからずと叫んだのであります。愛國の心はこの叫と共に起る思想でありまして、一轉勤王の精神となり、再轉討幕の擧となつたのであります。ですから明治の革新は百年の昔、既にこれら國學者の夢裡に往

來した所で、そこに養つた思想は、維新前後の志士の頭に熟して居たのであります。東嶽、眞淵、宣長、篤胤を國學の四大人といひます。

10. 古典の研究 國學及神道が古典の研究に出た事は、既に述べましたが、徳川の世を通じて、古文の研究が盛であつた事は、實に前代未聞、さかんに奈良朝以來の文詞の解釋に意を注ぎ、名著相次いで世に出たのであります。この方面の第一人者は釋契沖であります。

契沖は眞言宗の僧侶でありまして。そのはじめ高野山に登つて學行具さに修め、兩部大阿耨梨の僧位を得ましたが、後大阪の高津に居をトして、庵を圓珠庵と稱へました。佛書の外、國書を好んで深くその蘊奥を究めたのであります。契沖をして不朽の名をなさしめたものは、

萬葉集代匠記

の著であります。代匠とは嘗つて下河邊長流が水戸侯の依頼を受けて萬葉集の註釋をすべきでありましたが、長流が、その業の及ばる事を知つて、時の大家契沖を推舉し、契沖は長流の高風と、水戸侯の恩顧とに感じて、萬

葉の研究に没頭し遂にその業を終へて、水戸侯に献じたから出た名であります。梨壺に萬葉集の研究があつた事は、歴史にあります、その成績は傳はらず、當時にかけはなれた詞藻を読み解く契沖の苦心は、實に如何ばかりでありましたらう。契沖が眞言宗の僧侶であつた事は、自ら梵語に精しく、音韻の學理に通じて古語解釋の上に多大の便宜があつたのでせう。その著「和字正濫抄」の如きも國語學上の名著として、今日その餘徳を感じて居るほどであります。そのほか

古今余材抄 勢語臆斷 源註拾遺 百人一首改觀抄
厚顔抄

などもありまして、平安朝時代の文學は契沖によつて、釋明されたものが多くあります。

契沖の上方にあると相對して、江戸に同じく古文辭の註釋に力めたものは 北村季吟 であります。季吟はそのはじめ京都に住んで、松永貞徳のもとにあつたのであります、後幕府に召されて江戸に下り、和學所の長となつて法印に任せられました。その博覽多識は五十餘種に及んだ著書に窺ひ知る事が出来るので、説明精細、後

世を裨益するものが少くありません。

源氏物語湖月抄 枕草子春曙抄 徒然草文段抄

萬葉拾穗抄 和漢朗詠集註

などはその重なるものであります。季吟の事業は血あり涙ある創作の事とは、全くかけ離れて居るものではありません。想像を驅せて自在の筆を走らすものは、これ才氣。これは用意周密、博く探つて徐に筆を執る所の學術。一は猪突、一は保守。この兩者相俟つて、はじめて文化の圓滿な發達があるのであります。天性の文學と綿密な研究とは、決してその價值を云々すべきものではありません。まい。

契沖季吟によつて著手せられた、この古典研究は、その後の國學者によつて益攻究を深め、眞淵には

萬葉考 源氏物語新釋 伊勢物語古意 古今集打聽
宣長には

萬葉集玉の小琴 源氏物語玉の小櫛 古今集遠鏡
美濃の家づと

などがあります。これらは皆當時の代表的著述であります。その解釋する所は、多く萬葉、古今、源氏、伊勢

のほかに出でないのは、如何にこれらの文學が國民の心と離るべからざるものであるかがわかるであります。

11. 雅文 古典の研究は國學の隆盛を來たしたと同時に、一方復古的精神に基いて、こゝに文章そのものの復古を稱へて中古の語法文脈を學び、これを基として文を綴つた所謂雅文を見るに至りました。蓋し漢學に古文辭學派を生じて、その文辭を綴つたに相似て居ります。契沖以來既この風が無いのではありませんが、殊に文辭一方に傾いたのは、京阪の文運東漸して江戸に移つた明和頃以後であります。その主なる作家に 上田秋成 村田春海 橋千蔭 などがあります。

秋成は京阪に出で、春海、千蔭の江戸にあるに對し東西相應じて優雅の文に一世を風靡せしめました。これは明治の代にも及んで、婦人はこの種の文章を綴るを常とし、又獎勵教授せられたものであります。今春海の琴後集から、その一例をこゝに掲げます。

作蒿蹊のもとにおくる

秋の日數も残少うなりにたるを、都の御住居よ、いかに明し暮し給ふぞ。この武藏の海ばたは、大方山いと遙にて、露霜

の心おそき習に侍れば、立田姫のすさびも、はかばかしうも侍らずなん。さるは都の空のみ、ゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵にそみ給はぬあたりは、何の山里、くれの古寺、御心ゆく方ぞ多かりなん

都人 いづれの山の 錦をか 詞の色に たぐへては見る
此ごろは御手染のめづらかならんこそおほからめ。風の便を忘れ給はで示し給はば、下照蔭にともなはれ侍らんこゝちせんは、うれしきわざなるべし。立つ霧にな隔て給ひそ。

春海の「琴後集」千蔭の「うけらが花」秋成の「雨月物語」伴蒿蹊の「閑田文草」藤井高尙の「松の舎集」松平定信の「花月草紙」など皆同一の系統に屬する文體であります。

12. 小説 江戸幕府時代の特長が、平民文學の勃興にある事は既に述べました。韻文——歌謠——のもとに淨瑠璃があつた如く、散文のもとには各種の假作物語が平民の間にあらはれて、その數實に此期文學の半以上を占むるといふも差支ないほどであります。これらを總稱してこゝに小説と呼びます。その種類は時代により形式により内容により

假名草子 浮世草子 赤本 黒本 黄表紙 讀本
洒落本 草双紙 滑稽本 人情本

などがあります。何れも卑近の事象に題材をとつて、多く俗語を用ひて居りますが、文學の生命、生活描寫の妙味は、反つて、前時代から繼承した物語風のものに優るもので、武士の壓迫に堪へきれない鬱勃たる當時の空氣は、よくこの小説に窺ふ事が出来ます。

假名草子は、その最も初にあらはれたもので、室町時代のお伽草子を相去る遠くないものであります。和漢の古書に見えた珍説異聞を翻譯して、娛樂の爲、一には教訓の爲に、綴つたもので、いまだ純文學として獨立せず倫理書地理書などの小説化したものと見た方がよいであります。

如 備 子 可笑記

山岡元隣 誰が身の上

鈴木正三 二人比丘尼 因果物語

(淺井了意) 東海道名所記

中川喜雲 京童

などが、そのおもなものであります。

13. **井原西鶴** 元祿前後の平民は、凡て現代を謳歌して、古代の憧憬を事としません。現實に甘んじて、過去を追想する暇が無かつたのであります。平安朝に「今様」といふ詞があつたと同じく、この當時「浮世」といふ詞が流行しました。その趣は多少違ふでせうが、これ即ち現世を樂み、過去も未來も何のその、一生を面白おかしく暮せば、以て足れりとした傾向をあらはす詞であります。浮世繪といふものもこの頃から起りました。同じ意味を以てこゝに云はんとする、元祿の寫實小説浮世草子もあらはれたのであります。そして、その作家の第一は井原西鶴であります。

西鶴は大阪の人で、俳諧を西山宗因に學び、壇林の高足でありましたが、繁雜な都會に住んで、もとより花鳥風月を友とする事は出来ず、而も心に秘められた勃々たる文才は到底押へるに由なく、果然市井そのもの混雜そのものに向つて、彼の慧眼は投せられたのであります。人の心の秘密と風俗の真相とが對象となつて、西鶴の小説はあらはれました。西鶴の處女作は天和二年の「好色一代男」であります。これが、わが國の小説史上に特

色を出したもので、自然主義、現世主義が、ひらめき出されたのであります。西鶴の描いた世界は、初期に於ては戀愛を主とし、中期、武士を材とし、後期に至つて、町人の社會を對象としました。西鶴の西鶴たる所は、實にこの戀愛描寫と世相描寫とにあるのでありまして、僞らず、飾らず、極端なる直寫を平氣でやつてのけた所に見所があるのであります。道德を以て律せんとするのは、穩健な爲政の要であります。而も人情は變轉極なく、はかり知るべからざるものゝ存するを如何しませう。

浮世草子の流行につれて、寶永享保の頃、京都の書肆であつた自笑と其磧とがこれを學んで、數種を出しました。これを八文字屋本といひます。百姓盛衰記 世間子息氣質 風流東大全 風流西海硯 などはその主なものです。

14. 山東京傳 京阪の文運極まつて、大江戸の町人が、今度は獨特の潜勢力を草双紙にあらはしました。草双紙の最初は元祿に源を發して、お伽草紙の題材から文正、桃太郎、かちかち山、をはじめ在來の傳説に兒童を相手として、其の名も赤本と稱したのでありますが、

安永四年戀川春町の「金々先生榮華夢」が出るに及んで、風體一轉、當時の人情風俗を描いて、大人の讀物となりました。赤本は黒本、青本、黄表紙、と進んで別に洒落本を生み、口語をそのまゝに寫して、江戸時代中期後の町人生活が手にとるやうに見られます。これからは進んで所謂讀本^{ヨミホン}が出る事になるのでありますが、その間に出たのが 山東庵京傳であります。

京傳はそのはじめ青本に筆を執つて居たのですが、段々洒落本にうつり、非常な評判を受けました。けれども、京傳の餘りに自由な筆致は、當時幕府の發行禁止令に煩して、寛政三年遂に手鎖五十日の罰に行はれました。此の頃馬琴は京傳の門にあつて、その代作などをして居たのでありますが、京傳が刑後讀本に筆を執り出した頃は、馬琴もまた頭角をあらはして、京傳は在來の名聲に、馬琴は新進氣鋭の才を以て、互に相競ふに至りました。この有様は當時の一偉觀でありまして、文壇はいやが上にも人氣を呼んだのであります。けれども、京傳の舞臺は到底讀本の範圍にはなく、滑稽を主とし寫實を旨とした短篇の青本、洒落本の方が彼の價值を認めさせます。

15. **瀧澤馬琴** 本名は解。著作堂主人、蓑笠漁隱、玄同陳人など、號しました。醫術儒學などを學んだ事もあります。壯年の頃から讀書を好んで精勵刻苦、遂に讀本に筆を染めて、其の著はす所二百六十種、晩年眼疾をやんで明を失するに至つても、なほ著作の業をやめなかつたといふ精力家であります。

八犬傳 弓張月 美少年録 胡蝶物語 南柯夢 俊寛僧都島物語 朝夷巡島記

などは傑作と稱せらるゝもので、誰も知る所ありますが、これらを読むに従つて彼の博覽強記には實に驚かされます。馬琴の小説が在來のものに比して異なる點は、所謂、勸善懲惡主義を以て進んだ事で、これは輕兆浮華な點こそありませんが、非難される點は文中、往々不自然にわたる所が、多い事であります。馬琴は、歴史小説を以て最も得意としました。

南總里見八犬傳の一節（小文吾舟水を論ず）

引かれて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に雨戸おちなく開かせたり。當下、小文吾は先づ頭を回らして、彼此と見かへるに、樓上の東面には、僧一山が歎印ある、對牛彈琴とい

ふ四大字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九口の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今、夏と秋との違あれども、犬田が爲には、こゝも亦望郷の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれども、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つくづくと見わたせば、天ははやあけし横雲の、色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき加と満誓が、詠みたる歌はしら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり西に歌あり。葛西村落幾戸の烟、南に沖つあり、北に滅ゆるあり。鎌田、浮田、行徳の浦々、あれかとぞ思ふ目も適に、登る旭をふる里の、方とし見れば、翁さびし、父のうへ又親戚のこと、胸に湛へてながらふる、かひこそなけれ劍刀、身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵より數しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ。尺蠖の伸びんとする時、まづその身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし。あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり。又眞帆あけて走るあり。繋ぎし船は走るべからず、走る船は留りがたし。和殿が

今の滞留も、只この理をもて悟るべし。これをわが上に譬へていはゞ、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて、又よく船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだに辯へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん。かの憐國なる敵の爲に滅ほされんこと疑なし。某も亦千葉の一族馬加光輝^{マツハリ}の姪なれば、代つて取るとも、誰か咎めん。されば享徳の例に倣うて、自胤に詰腹切らせ、わか兒鞍淵吾常尙^{ヒサ}を當城の主^{マツハリ}にせばやと、思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず。和殿今よりわれを佐けて、事成る時は、葛西の半郡を宛て行ふべし。うけひかれんやと、小膝を進めて、また他事もなく弄けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひがけなき密儀を談ぜらるゝものかな。某素より學門せばれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん。貴所は只水と船との反覆を説きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや。いかにとなれば、水の船を浮むるは經^{ツネ}なり。その船を覆すは變なり。苟しくも只その變を己が利として、その經^{ツネ}を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に楫あり、君臣禮を失ふふきは、舟車に楫を失ふが如し。一旦その利を得るといへども、滅亡せんこと疑なし。その君を殺せしもの、誰かその久しきを保ちたる。希望^{コヒネガハ}くは非議の妄想を除き去りて、



柳亭種彦自筆の黄双紙草稿

千葉家の諸葛といはれたまはゞ、徳誼後世に芳流して、子孫余度を承くることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし。いかでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ念するの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面に見はれて、手を又きて物いはず。

讀本のほかに、黄表紙から發達した所謂草双紙なるものがあります。柳亭種彦はその作者でありまして、

諺紫田舎源氏

は最も著名の作。巧に源氏物語を翻案して、文中の和歌の代りに俳句を入れて、當時の世相を輕妙な文章で寫し出して居ります。

16. 滑稽文 韻文の滑稽的分子は狂歌と狂句とに見た所でありますが、散文にも同じくこの種のものがあります。作者は式亭三馬と十返舎一九でありまして、この種の作を一般滑稽本といひます。

三馬は純江戸の町人、本名は菊地泰輔といふのでありますが、滑稽の想に富み、著作は頗る多くありますが。うちに

浮世風呂 浮世床

は最も有名で、當時の生活が、あからさまに寫されて居る所に、その價値を認められます。

一九は、本名、重田貞一、駿河から江戸に出て、戯作に筆をとつた人で、

道中膝栗毛

は彌次喜多の名に、今も普く知られて居るものであります。

座頭の川わたり (膝栗毛)

夫より鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくり上げて爰を渡るに、彌次郎北久も、いざや引き連れ渡りなんとする折柄、京のほりの座頭二人連、此川の歩渡なるを聞きけるにや、一人の座頭

犬市 もし川は膝ぎりもござりますかな

北八 さやう、さやう、しかし水が早いから、おめい方アあぶない、用心して渡んなせえ

犬市 ハテ成程水の音がよつほど早い

といつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、

犬市 イヤこゝらがどうか浅いやうだ、コリヤ猿市、二人な

がら脚絆をとるも面當だ、お主若役におれをおぶつて渡れ

猿市 ハ、ハ、するい事をぬかす、拳で渡らう、何でもまけた者がおぶつて渡るのだがよしか

犬市 こりや面白い、サアこんさんなア梅で

猿市 りやんごうさいさい

と片手拳うちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握り合ひ、

犬市 サア勝つたぞ、勝つたぞ、

猿市 エ、いまましい、そんならこの風呂敷包を、貴様一所にしよはつせえ、ソレよしか、サア來いサア來い

と支度して、脊中を向ける。彌次郎これはありがたしと、猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはひり、難なく向へ渡ると、こなたの岸に残りたる犬市

ヤイ猿よ、どうする、早く川を渡さぬか、

猿市向の岸にて聞きつけ、腹を立て

コリヤじようだんな奴だ、たつた今おぶつて渡したに又そつちへ行つておれを鬪るな

犬市 馬鹿いへ、おのればかり渡つて、太い奴だ、

猿市 太いとはそつちの事だ

犬市 コリヤおのれ兄弟子に向つて、言語道斷な、早く来て

渡さぬか

と白い眼をむきいで腹立る故、猿市仕方なく、又こちらへ渡りて歸り

サアそんならおぶさりなさろ

と背中を出す。北八しめたと手をかへておぶされば、猿市又サツサと川へはひる。犬市は大きにせきこみ

コレ猿市どこにをる

猿市川中にて

イヤこいつは誰だ

と北八を川の中へどんぶりおとす、

北八 オイ助けてくれ助けてくれ

と手足をもがき流るとゆゑ、彌次郎飛びこみ引き上げれば、頭から骨までくさる程ぬれ

北八 エ、座頭めが、とんだ目にあはしあがつた

彌次 ハ、ハ、ハ、まづ著物を脱ぎやれ、絞つてやらう

北八 全體彌次さんがわるい、何のおぶさらずといふ事に、

お前が手本を出したから、ツイおれも

彌次 川へはまつたか、氣の毒だ、ハ、ハ、ハ、それで一

句やらかした

はまりけり 眼のなき人を 侮りし むくい早い 川の流に

滑稽文としては、このほかに狂文と稱する一體があります。風來山人、手柄岡持、蜀山人など、狂歌狂句をやつた人が、同様の趣味を以て綴つたものです。

風來山人 六々部集

蜀山人 四方のあか 四方の留柏

手柄岡持 我おもしろ

宿屋飯盛 あづまなまり

などのうち次に一例を掲げませう。

四方の留柏 (筆はじめ)

春は曙、やうやう懸取りを戻してより、雑煮の餅も咽につまらず祝ひ、銀燭と詩に作れば、子細らしけれど、古行燈のしの田づまとも化けさうなを、はしごの下にかたよせ、やぶれ障子はればれと掃出すべきを、元日なれば箒もとらず。陳子昂が福如東海とかきし掛物、日ざしのむきみ馬鹿がたけれども、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の付床にさらりとかけ、伊豫簾は却て巻あけたる庭の景色そどろごとの浮み出るを、試筆とかいひて、したりがほに書きつけたるも、大つもごりのくるしさを忘るゝに似て、巨燧辨慶とや笑はれんとをか

し。されば清女がすさみも、狭衣の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつもうれしき正月心に、願はくば二十年あとへ猿江りのごとくすべりかへれと、我のみおもふかも、

× × × × ×

要するに徳川期の文學は、過去の研究と共に、復古の文學があり、一方に現代主義の新興文學があつたといへます。そして前者は、所謂學者の間に、後者は町人の間にあつたのであります。奈良平安朝の文學が鎌倉室町の一時代を過ぎた徳川期に研究せられたやうに徳川の文學は、まだわれわれにはあまりに近すぎる爲でありますか、その研究といふものは、餘り進んで居りませんが、その内容はこゝに見て來た通り、頗る豊富なものでありますから、將來は益發展する事でありませう。

第七章 明治 大正時代

1. **明治維新** 我邦の歴史を顧れば、凡そ三四百年毎に新思想が勃興して、舊世界を破壊し、その新しかつた思想は更に新しきものに破られるやうであります。幕末海外思潮の影響は、復古精神の鼓吹と相應じて、尊王

攘夷となり、一轉王政開國となりました。頼朝が幕府を開いた後、或は遡つて藤原氏が政治の實權を握つて居つた時代から、凡そ千年の久しい間を過ぎて、こゝに再び王政の復古を見たのでありますから、家康が同形式の幕府を再立したのとは、甚しく趣を異にします。而も江戸の開府でも、既に民心の新なものを見たのでありますから、明治の維新に國民の思想が大きな變轉をし、新しきに向ふ有様は、これ自然の勢、時代の流であります。加ふるに、二千年來未だ嘗つて知らなかつた、西洋文明に接したのでありますから、忽ちに四民の階級は撤せられ、結髪を切り、刃を解き、社衾は洋服帽子に、驛路傳馬は汽車汽船と、疾風の過ぐるやうに改革せられました。まことに維新後の暫時は、西洋文明心粹の時代で、物質界に於ける泰西文明は須臾にして日本に勝利の旗をあげました。革新は一面に破壊がなければなりません。明治元年三月五事の詔勅を下し給うたうちに、

舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

とあるのは、即ちこれで、當時の壯年者が意氣は、これを以て、天下の大道を成就したのであります。政治の組

織は一變しました。廢藩置縣は幾多の困難を排して斷行せられました。明治初年の國民の努力は、一に舊きを棄て、新しきをとるといふ一念にあつたのであります。維新以來いまだこゝに五六十年、半世紀を過ぎたばかりでありますから、破壊後の新思想が確立しませんのは、何時の革新を見ても、その通りであります。思ふに、これから後の五十年こそ、新しき日本の建設が、真に行はるゝ時期でありませう。

けれども。破壊の中に建設の準備は急がれて居ります。今日までの所は、泰西文物の輸入に、ほとんど全力を注いで居りましたが、この模倣の後に、心靈界の要求が眞面目に起り來るのでせう。悠久なわが帝國の歴史は國民の智能を永い間に育成し來つたのであります。維新それ自らが、自覺に基く運動であつた通り、古來の蘊蓄は決して漫然たる模倣にのみ走るものではありません。この國民の自覺心と外來の文化とは、著しく吾々の思想を豊富にして、一時没趣味に陥つた維新當時の思想界も、今日は各方面非常な盛況に向ひつゝあるのであります。わが國文學と西洋文學との研究は併せ行はれて、或は文

字の改革を稱へ、或は言文一致を論じ、新進氣鋭の文學者は、舊來の歌文に倦きて、新體を試みるものも多く、文壇は愈益隆昌の氣運に向はんとして居ります。維新當時の忙しかつた世の中から比べれば、今日は國民の生活に餘程餘裕を生じつゝあります。

2. 新文學 これはもとより、西洋文學の翻譯にはじまりました。そしてその作品は外來の文學論に刺戟されたものが多いのであります。そのはじめ文壇に起つて、先づ泰西の文明を紹介したのは、福澤諭吉でありませう。その平明暢達の文は、決して不用意の間に生れたものではありません。粗大誇張の漢文調を打破して、文語と口語との調和をかはり、西洋事情を紹介して、獨立自尊、自由平易を鼓吹した事は、その文章上の功績と共に、純粹の文學論ではありませんが、先づ國民に新たな思想を傳へたのであります。

坪内逍遙の小説神髓は、藝術は決して實用の奴隷たるべきものではない、幕府以來の勸善懲惡主義は偽である、吾々は自然を目的としてありの儘の客觀的寫實に進まねばならぬと高く叫んだのであります。小説は婦女子の弄

ぶものとのみ思はれて居た陋習を打破して、教養ある士人の讀物としてなほ大きな價值のあるものとせられるやうになりましたのは、實に逍遙がその主張の預つて力があつた所であります。小説ばかりといはず、明治時代の文學が、この聲によつて位置を高め、高尚な作品を續出するに至つたのは事實でありまして、この叫は明治大正新興の文學界に一新時期を劃すべき文學論でありました。明治の末年、夏目漱石また文學論を著はしました。當時の思想界は既に幼稚の域を脱して、哲學に宗教に、東西の學理が論究せられて居た頃でありましたから、泰西の文學論を基とし、論理極めて明晰な此の論文は、囂々たる論戰の波瀾中に、一道の光明を與へた事は疑ありません。このやうに維新以來の文學は、一方に西洋文學の紹介翻譯が盛でありますと同時に、一方にはよくこれを咀嚼して斯界の木鐸となり指針となつた文學論がありましたので、愈堅實な途を進む事が出来たのであります。要するに、新文學の傾向は、元祿の自覺が一部の社會——平民——に限つたものであつたに反して、これは上下を問はず、一般國民が自覺自信の上に立つての精神に基く

所にあるのでありませう。

3. 和歌 俳句 新體詩 和歌は日本文學史を通じて、一貫した流れのあるものである事は、既に説きました。維新の志士が、明日をも知らざる殺伐の境遇にあつても、なほ悠々詠ずる所のものは、わが和歌でありました。明治、否、今日の御代にも、前代繼承の文學は存するのであります。これが、所謂國粹保存の思想と深い關係を保つのでありませう。明治天皇は、殊に和歌に御心を寄せられまして、御一生の御製は事にふれ、時によつて其數非常な數であるといふ事があります。今もなほ勅題を賜はつて、宮中の御歌會始に、國民の一般が詠進するのは、日本でなければ見られない美風であります。宮内省に御歌所のあるのは、平安朝の和歌所を傳へたもので、これを中心とする歌風はまた鎌倉、足利、徳川の長期をそのまゝに流れ來り、保存せられ來つた、典雅を旨とするものであります。

この舊派に對して、新思潮にかられ、自由な語調を以て自然を歌はんとするものに所謂新派が起りました。徳川時代に眞淵等が稱へ、かつ試みた所は、復古にありま

す。明治の新派は何等過去に束縛せらるゝ所なく、事象を直接に主観客観するのを旨として居ります。蓋しその根本觀念は維新以來の進歩主義と同じであります。

俳句に至つても和歌と同様の傾向を以て進みましたが、その中に最も注意すべきは正岡子規であります。從來芭蕉を以て斯道の神と仰ぎ、一言一句その旨に違はざらん事をこれ事とした風潮は、子規の卓見と眼識とによつて、その迷夢が破られたのであります。

子規は芭蕉の俳句を深く研究して、その非を非とし是を是とし、公平な位地に立脚して、門下を率ゐた事は、明治俳壇の偉觀であります。然し乍ら、和歌に舊派が依然その勢を墜さないのと等しく、俳壇に於ても、今日なほ舊派の命脈長く保たれて居ります。

こゝに歌の一體として新體詩なるものが生れました。外山、山、矢田部尙今、井上巽軒などの新しい試で、その詩集を新體詩抄といひますが、當時——明治十四五年——はまだ、舊文學の名残が、勢力を墜さなかつた爲であります。格调用語の雅醇を事とした歌人國學者にも悦ばれず、一般にも聲調の新に過ぎて卑しい爲と、用語

が餘りに自由で蕪雜な事とを貶され去つたのであります。然しながら、もとの運動は、從來短歌の簡単な形式ばかりを以て、歌調と心得て居る風潮に、慨して、起つたのでありますから、社會の自然の要求は其後長形の歌詞をもとむる事切りで、音樂の發達——西洋音樂の日本化など——と相待つて、漸次その姿を整へまして、今日では、童謠、歌劇などに意外の勢力を得るに至りました。落合直文の「孝女白菊の歌」などは過度期の名篇といひ得るものでありませう。

4. **戯曲** 幕末から續いて隆昌、滿都の人氣をあつめたものは、所謂芝居であります。市川團十郎、尾上菊五郎の名優が舞臺に立つて、或は舊劇に或は新劇に、その妙技を演じた裏面に、靜かにその脚本を草した最初の人、河竹默阿彌であります。そのはじめの頃は多く盜狹を主題として「村井長庵巧破傘」などを書きましたがこれは例の勸懲主義に捕はれて居るもので何等清新の氣風を見ません。けれども默阿彌の作も維新當時を去るに随つて、作物は漸く舊時代の風を脱して、所謂明治の世話物を書くやうになりました。

この後戯曲界は混沌として見るべきものではありませんでしたが、明治十六年の頃、かの坪内逍遙がシェークスピアの「ジュリアス、シーザア」を淨瑠璃體に翻譯して「自由太刀餘波銳鋒」と題したものが、世に出づるに及んで、一時に朝野の注目する所となりました。これ即ち泰西脚本の紹介せられた、最初のものであつたからであります。當時一方には演劇改良の聲が高まりました。従來芝居は、中流以下の人が見物すべきものとなつて居りましたが、この頃から段々西洋通の人々によつて、演劇の高尙な娛樂であるべき事が説かれ、在來の夢幻劇は新觀劇家の満足する所とならなくなつたのであります。其後、依田學海はこの改良論に乗じて、舊劇の卑猥殘忍を棄て、不自然に陥らない寫實的の筆をとりました。また福地櫻痴も、この頃政論の筆を止め梨園に入つて、専ら史劇の作に力を盡し急激な改革の非を悟つて、團十郎の活歴的腹藝的趣味と共に、多少西洋の性格劇をとり入れて、漸進の歩を運んだのであります。これが一時は都人士の趣味に投じて、開幕毎にわるゝばかりの盛況を呈しましたが、こゝに劇道にもまた新派なるものがあらは

れました。そのはじめは書生劇として、貶されたものでありますが、今日は既に整然たる體を具へて、新劇はその生命を將來に囑目せられて居ります。帝國劇場の設立は、斯界に一新時期を劃するものであります。これあつて以來、西洋そのまゝの演劇も自由に上場せられ、外人の來つて、眼のあたりに、その劇を演じ、さては、歌劇に音樂に、明治以來論せられ紹介せられたものが直接に賞鑑さるゝ事となりましたから、將來の斯界はこゝに更に新な發展の途を見出すであります。

5. 小説 維新後の當時は、憲法發布、國會開設と世の中の問題は皆政治でありました。國民は急激の變動に瞬く暇もなく、不知不識の間に政治の趣味に走りましました。こゝに政治家は文筆を以て、政治趣味の普及に盡し、所謂政治小説の流行を見たのも、これ皆時代の然らしむる所であります。當時の流行語は「自由」といふ詞でありまして、自由亭、自由煎餅、自由丸などゝあらゆる方面に用ひられましたが、これは疑ひもなく佛國革命の思想が舶來せられたもので、ルツソーの民約論は、一般の讀書界に異彩を放つものとなりました。殊に明治十年後は、

新聞紙の刊行が種類も部數も、非常な増加を見て、民間の言論を代表し、國民の輿望を負うて、刻下の政治に容喙するといふ有様でありましたから、これに連載せられる小説も尊王攘夷二派の軋轢とか佛國の革命運動とか露國の虛無黨とか、いふものを材料として、悉く自由民權の輿論を沸騰せしむるものでありました。柴東海散士の「佳人の奇遇」矢野龍溪が「經國美談」末廣鉄腸が「雲中梅」「花間鶯」須藤南翠が「綠簑談」「新粧の佳人」などはその主なものでありまして、外國の政治運動を中心にして、亡國の志士や、新興國の勇士を多く描いて居ります。その盛況は幕末殘存の文學者をして、一時全く閉塞せしめた程で、假名垣魯文の如きは、あれども無きが如き有様でありました。

政治小説に次いで起つたのは、寫實主義の小説であります。これは曩にも説いた坪内逍遙の小説神髓に論せられた主張の實現で、逍遙は自ら「當世書生氣質」を出しました。新舊思想の衝突切りの間にあつて、明治の新制度新教育に育てられた所謂書生なるものが、血氣にかられて、自由に行動する社會の多方面を描き、うちに諷刺

の筆を交へたものであります。此の書一度出て、褒貶の聲は四方に起り、評論界は一時に沸騰した有様でありましたが、要するに勸懲の陳腐を捨て、善玉悪玉の舊型を脱したこの新體は、其後の文界を厭して、今日の成功を見たといふ事が出来ます。二葉亭四迷の「浮雲」は、更にこの主張を裏書するものでありまして、これこそ眞に新時代を模寫した所謂寫實小説でありました。篇中に活動する處女の心理、青年の情緒、何れも當代そのものを寫して、新人を悦ばしめたのでありますが、浮雲の特長はそれのみではありません。實にその文體が作者一種の發明にかゝるもので、これこそ、明治時代の大産物言文一致の魁をなしたものであります。この點を以て、また四迷の名は恐らく千載に不朽のものとなるであらう。四迷は其後永く筆を執りませんでした。明治の末再び起つてツルゲネーフなどの露國文學を紹介し、創作には「其面影」ほか數篇を綴つて、當時の文界を賑はせました。

四迷の作後、この主張を普及したものは、硯友社の一派であります。尾崎紅葉 石橋思案 山田美妙齋 丸岡

九華 などでありまして、これらの少壯文學者が集つて「我樂多文庫」を創刊した事は、これまた忘れてはならないものであります。紅葉の名作は「金色夜叉」であります。その他「多情多恨」「三人妻」「二人女房」「加羅枕」「色懺悔」など、何れも人情の弱點を發き、個性の描寫に、妙味をあらはして、所謂心理小説の時代に進まんとする傾向を、寫實的文詞のなかにあらはして居ります。このほか、巖谷連、川上眉山、廣津柳浪、何れも獨特の才筆を振ひましたが、文壇の將星としてこゝに又幸田露伴があります。露伴は名作「五重塔」を出して名聲一時に高く「風流佛」「天うつ浪」に紅葉と並び立つて、世に迎へられました。饗庭篁村の文章は當時元祿耽美の聲に應じたもので、八文字屋一流の諷刺文は「當世商人氣質」に見る事が出来ます。齋藤綠雨が「あられ酒」は當時の儕輩に見ない、獨特奇拔な、彼の性行を窺ふ事が出来、矢崎嵯峨舎の文は、天真流露、熱烈な哀觀を呼びます。こゝにまた、翻譯家として並ぶものなき森鷗外があります。獨乙語學の素養深つた鷗外は、天成の才筆に各種の文學を紹介して、一方、創作に評論に、文壇の重鎮とし

て大正の世にまで及びました。

このほか、傳奇小説の類には、依田學海、村上浪六、黒岩涙香の作が澤山に出ました。内田魯庵 後藤宙外 廣津柳浪 小栗風葉 小杉天外 泉鏡花 村井弦齋 徳富蘆花 菊池幽芳 島崎藤村 永井荷風 何れも一流の文學者であります。夏目漱石は、處女作「坊ちゃん」に世の喝采を搏して「草枕」「三四郎」などに進んだ事は、まだ記憶に新な事であります。谷崎潤一郎 菊地寛 久米正雄 長田幹彦 小山内薫 などが最近に名作を出して、更に一新傾向を生まんとする有様は、將來大に矚目すべきものがあります。

要するに、文學は時代の表現でありまして、現代はその文明の基礎益強固に、その進運愈堅實に、他日の圓滿渾成に向つて一步一步進みつゝあるのであります。國家の整頓と共に、國民には文藝鑑賞の餘裕を生じます。將來日本の文明が東西の粹を蒐めるとすれば、その文學の前途もまた、多幸なものでありませう。

ふみよめば やまともろこし むかしいま

よろづのことを しるぞうれしき

本居宣長

Old wood to burn! Old wine to drink!

Old friends to trust! Old books to read!

BURNS : Eepistle to Davie.

◆ 小さい國文學史 ◆

大正十二年四月五日印刷

大正十二年四月十日發行

Copyrighted



著者 植松 安

東京市京橋區南橫町十八番地

發行者 大倉廣三郎

東京市本所區番場町四番地

印刷者 矢形 豊

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所

東京市京橋區
南橫町十八番地

廣文堂書店

振替東京四六八四 ● 電話京橋二四六三

■ 定價金一圓八十錢 ■

◆ 書叢化文新るす愛を智 ◆

文部省囑託ドクトル、川邊喜三郎氏著
オヴ、フイロソフイル
小さい社會學原論

文部省囑託ドクトル、川邊喜三郎氏著
オヴ、フイロソフイル
小さい應用社會學

文部省囑託ドクトル、川邊喜三郎氏著
オヴ、フイロソフイル
小さい社會心理學

農大講師文學士 青木誠四郎氏著

小さい教育心理學

松山高校教授理學士 神谷辰三郎氏著

小さい動物學

本書が如何に若き人々の心に觸れ歡迎されてゐるか、は本書の同人がみな少壯にし敬虔なる學徒にて又獨創的頭腦の所有者たる篤學の士のみにて本書の内容が其の若き新人の體驗を基とし各書共その一般概論、體系を最も平易に獨特の敘述をしたなれば也。
眞理に對し燃ゆる思慕を捧ぐる若人、智識の殿堂の扉を開かんとする士の先づ愛讀すべき好著にて各中等學校高學年の參考書としても適切なり、敢て愛讀を乞。

中美 判本 各 錢 十 八 圓 一 金 各 送 料 二 錢

◆ 書叢化文新るす愛を智 ◆

七高教授文學士 後藤弘毅氏著
小さい心理學

富山縣師校長文學士 蜷川龍夫氏著
小さい倫理學

富山縣師校長文學士 蜷川龍夫氏著
小さい實踐倫理學

七高教授文學士 後藤弘毅氏著
小さい論理學

帝大助教授文學士 阿部重孝氏著
小さい教育學

本書が如何に若き人々の心に觸れ歡迎されてゐるか、は本書の同人がみな少壯にし敬虔なる學徒にて又獨創的頭腦の所有者たる篤學の士のみにて本書の内容が其の若き新人の體驗を基とし各書共その一般概論、體系を最も平易に獨特の敘述をしたなれば也。
眞理に對し燃ゆる思慕を捧ぐる若人、智識の殿堂の扉を開かんとする士の先づ愛讀すべき好著にて各中等學校高學年の參考書としても適切なり、敢て愛讀を乞。

中美 判本 各 錢 十 八 圓 一 金 各 送 料 二 錢

◆ 書 良 的 想 理 ◆

文學博士 大瀨甚太郎先生著
教育的心理學

◆ 名著第六十二版 ◆
菊判布製美本全一冊
金三圓八十錢
送料金十二錢

東洋大學教授 高島平三郎先生著

兒童心理講話

◆ 好評縮刷十二版 ◆
新形布製美本全一冊
金二圓五十錢
送料金十二錢

醫學士 高峰博先生著

個性と能率

◆ 最新刊 ◆
菊判布製美本全一冊
金三圓五十錢
送料金十二錢

前大坂兒童相談所員 稻葉幹一 先生著

青少年**職業選擇** 其の教育

◆ 最新刊 ◆
菊判布製美本全一冊
金三圓五十錢
送料金十二錢

◆ 書 叢 化 文 新 る す 愛 を 智 ◆

松山高校教授理學士 神谷辰三郎氏著
小さい生物學

七高教授文學士 後藤弘毅氏著

小さい哲學

松山高校教授理學士 神谷辰三郎氏著

小さい自然科學

帝大助教授文學士 植松安氏著

小さい國文學史

早大教授文學士 安藤正次氏著

小さい國語學

本書が如何の心に觸れれば本書は壯にし敬虔なる又獨創的頭腦の所有者たる篤學の士のみにて本書の内容が其の若き新人の體驗を基とし各書共その一般概論、體系を最も平易に獨特の敘述をしたなれば也。
眞理探求者理想の殿堂の扉を開かんとする士の先づ愛讀すべき好著にて各中等學校高學年の參考書としても好著なり、敢て愛讀を乞。

中美 各 判 金 一 圓 十 八 錢 送 十 二 錢 各 錢

◆ 書 良 的 想 理 ◆

文學博士 小西 重

犯罪少年

調査

◆好評第五版◆

菊判布製美本全一冊
金三圓一十八錢
送料金十八錢

大川 義 行 先 哲 著

兒童個性

研究

◆良書三十版◆

菊判布製美本全一冊
金二圓五十二錢
送料金十二錢

東京高師訓導 黒沼 勇 大 師

劣等兒

原因の教育

◆最新刊◆

中判布製美本全一冊
金二圓五十二錢
送料金十二錢

群馬縣師範學校編

新思潮に立脚せる各科教

◆新刊忽三版◆

中判洋裝美本全一冊
金二圓八十二錢
送料金十二錢

522
63

終